

# Globalization について

内田真人\*

2002年9月

## 目次

1 対外経済貿易大学と Globalization	2
2 日本と Globalization	3
3 国際化と Globalization	3
4 Globalization とは、	4

---

\*webmaster@mupn.com

## はじめに

中国では Globalization の訳語は "全球化" が使われているようだが、日本では "世界化" が使われている。この言葉をキーワードにした講義を何度か聴いたが、授業で聴いた解釈と私が日本で学習した解釈は、若干違うように感じられた。この原因はおそらくこの言葉が、第1に新しく、第2に英語であり、第3に多くの学問分野で使われているからであろう。

この言葉が新しいことは、手持ちの経済事典からすぐにわかる。長谷田彰彦『完全体系 経済学事典』は1984年に出版されているが、この本には Globalization という言葉は載っていない。金森久雄他編『有斐閣 経済辞典 第3版』は1998年に出版されており、この本には Globalization という言葉が載っている。私は1994年から1998年まで日本の大学で経済学を学んでいたが、Globalization という言葉はあまり使っていなかった。これに近い概念は、国際化 (Internationalization) であった。

この言葉が英語であることは辞書を引けばすぐに分かる。言葉と文化は密接な関係があり、外国語の意味を完全に自国の言葉で置き換えることは出来ない。つまり、原語と訳語の意味には、ズレが生じる。

この言葉がいろいろな分野で使われていることは、毎日のニュースから分かる。私は主にインターネットを使って日本語のニュースを読んでいる。そこでは、いろいろな分野の専門家が Globalization という言葉を使い、時にはその言葉の意味についても話している。例えば、経済学者は市場が世界規模になることだと語り、政治学者は文明が衝突することだと解釈したり、唯一の超大国が影響力を世界に及ぼす過程だと言う。

私はこのような多義的な言葉について語る前にこのレポートの目的を明確にすべきだろう。私は経済学者の視点で日本語の "世界化" が表す意味について考察する。

## 1 対外経済貿易大学と Globalization

まず、告白しなければならないのは、私がどのくらい大学院の授業を理解したのかということである。

大学院では Globalization に関する授業が4、5回行われたはずである。定かでないのは私の手元には4回分の講義ノートしかないからである。日付からは6回授業が行われたと推定できるが、1回は休講になった。また、私の中国語は、まだ十分ではないので教授の講義や同級生の意見を正確に聞き取れなかったことも考えられる。私は基本的に大学院の講義と私が理解していたものを比較しながらこのレポートを書き進めるが、大学院の授業の理解が不十分であり、且つ誤解すらありえることを正直に書かざるをえない。

Globalization についての授業は、2つの部分から構成されていた。1つは数回の講義であり、もう1つは最終日の討論である。

数回の講義は "Globalization of World Economy" と題され、進められた。章立てのみここに書き記せば、第1章 背景 (Background)、第2章 五流 (?), 第3章 総合国力 (I.N.C.P)、第4章 特徴 (The Main Features)、第5章 メリットとデメリット (The Advantages and Disadvantages)、第6章 計量 (Measures)、第7章 反世界化運動 (Anti-Globalization Movement)、第8章 潮流 (The Main Trends of Globalization)、第9章 多国籍企業の積極性 (The Main Ardors of Transnational) である。章立てを改めて見れば、講義の基調は、すでに書いた経済学者の視点、つまり市場が世界規模になることであろう。特に第6章 計量は、社会科学であろうとする経済学者の特徴である。しかし、講義において具体的な数字があまり示されなかったのは、とても残念であった。

学生の議論では、実に様々な視点があったように思う。もっとも長く議論していたのは、WTOとの関係であった。

中国のWTO加盟は、「中国のGlobalizationが本格化することである」、又は「中国のGlobalizationそのものである」という意見と「中国のGlobalizationはすでに始まっている」、又は「Globalizationは大きな概念であり、WTOだけではそれを語りきれない」という意見の対立だったと思う。これら議論の論点は、中国におけるGlobalizationの開始時期であり、Globalizationの定義である。私の見解は後で述べる。

WTOの他にはIMFや多国籍企業についても議論された。また時に政治学的な唯一の超大国が影響力を世界に及ぼす過程との見解があったように思う。この政治学的な見解を語る時には、同時に南北問題の視点があった。ごくわずかであったが、文化や文明の衝突といった見解もあった。これは時事問題としてアフガニスタンのタリバン問題があったからだろう。このような経済学の範疇を越える議論がなされていたが、教授はあえて議論を遮ることはせず、自由に発言させているように感じた。

## 2 日本とGlobalization

学生の議論は、中国におけるGlobalizationの開始時期であったが、私は中国語の文献をまだ十分に活用できないので、まず日本におけるGlobalizationの開始時期を推定したい。

「はじめに」でもふれたが、Globalizationは新しい言葉であり、且つ英語である。日本ではいつ頃からこの言葉が使われるようになったのだろうか。

すでにふれたように1984年の『完全体系 経済学事典』には、「世界化」という言葉はない。少なくとも1984年頃は「世界化」という経済用語は日本になかった。1994年の百科事典『マイペディア』にもない。1995年の『現代用語の基礎知識 1995』500ページには、世界複数本社制の解説に「企業のグローバリゼーションの展開...」という一文があり、日本ではYAMAHAやSONYが先駆的と紹介されている。更に1402ページに外来語のGlobalizationの訳語として「世界化」と「全世界一体化」が記されている。1996年の『朝日現代用語 知恵蔵 1996』を参照すれば、「世界化」の訳語と「企業経営での世界複数本社化」の解説がある。

以上から日本では1995～96年頃にGlobalizationが紹介され、訳語として「世界化」が定着していったことがわかる。また、当初は経営用語で企業の世界化と世界複数本社化を指したこともわかる。

日本でも対外経済貿易大学の授業と同様に多義的に使われることがある。最新の日本語文献は残念ながら持っていないが、1998年出版の『有斐閣 経済辞典 第3版』280ページには、「ヒト、モノ、カネ、そして情報の国境を越えた移動が地球的規模で盛んになり、政治的、経済的、あるいは文化的な境界線、障壁がボーダーレス化することによって、社会の同質化と多様化が同時に進展すること。」と解説されている。ここではすでにGlobalizationは、経営の専門用語ではなく、文系の主な学問分野を横断している。つまり、1998年頃から日本でも対外経済貿易大学の授業と同様に多義的な言葉として使われるようになった。

## 3 国際化とGlobalization

多義的な意味を持つ今日のGlobalizationの意味についてよくよく考えてみると以前から使っていた国際化の意味に近いことがわかる。

世界化と比較しながら国際化について考えてみる。今日の我々が知っている世界は、日本では江戸時代(1603~1867年)の末期に認識されるようになった。

日本では江戸時代に鎖国をしていたので大半の日本人が世界について知らなかったのである。開国してから日本人は世界を知るようになった。開国は黎明期の国際化とも言うべきものであろう。明治政府は、富国強兵と殖産興業のスローガンを掲げ、近代化政策を押し進めた。日本の国際化のきっかけは、外圧であったが、その進展は一般的に内発的であったと考えられる。明治政府の方針からは、近代化のための国際化が見てとれる。

また、経済学的には、マルクス・レーニン主義の“封建主義社会 資本主義社会 帝国主義社会”やS.S.クズネツツの“近代的経済成長”や経済史的な“産業革命”と理解してもよいであろう。ここでは、どのような解釈を採用するのかということ議論しない。ただ、国際化も多義的な言葉であり、同時に時代を形容できるとても便利な言葉だということである。

国際化と世界化の意味は、かなり近い。しかし、日本では世界化が1995年から使われるようになり、国際化はそれ以前から使われていたという違いがある。2つの言葉の違いには、時代の変化が大きく関係していると言えよう。

1995年出版の『現代用語の基礎知識 1995』には、「企業のグローバル化の展開...」、「企業経営での世界複数本社化」とあり、まず経営の分野で世界化が使われるようになったのは、すでに述べたとおりである。経営、特に企業に注目して時代の変化を分析すれば、国際化と世界化の違いが明確になるかもしれない。

私が小学生だった1980年代には社会科で、“日本は資源が乏しい国だが、貿易によって発展している貿易立国である”とか“外国から資源を輸入して、再び輸出する加工貿易国”だと勉強した。これは、基本的に戦後の日本の経済成長をうまく言い表している。しかし、このような経済成長方式は、1985年のプラザ合意によって転換を迫られた。プラザ合意は先進5カ国蔵相による円高ドル安誘導であり、日本企業は輸出競争力の低下から、生産拠点の海外移転を迫られるようになった。このようにして日本の国際化は、従来の主に生産物を輸出するだけの段階から生産拠点を海外に移す段階になった。つまり、日本の製造業が次々に多国籍企業になったのである。これら多国籍企業が経営効率の観点から国際化を進める一方で、現地化(Localization)する過程の1つが世界複数本社制であろう。日本ではこのような新しい段階の企業の国際化を形容するためにGlobalizationが使われ始めたと言えそうである。

日本の企業の例から国際化と世界化を分けるキーワードとして現地化を抽出することができそうである。

## 4 Globalization とは、

これまでの分析からGlobalizationは、時代を形容できる便利な言葉であり、国際化と意味が似ているが、現地化というキーワードによって相違点を明確にできるという結論をえた。しかし、この結論ではあまりに一般的なもので、経済学の分析ツールを借用して、もっと厳密に分析してみる。

日本におけるGlobalization開始時期についての考察は、経済学で分析するための手がかりを与えてくれる。

鎖国をしていた江戸時代は、基本的に封鎖体系、開国後は、開放体系で考えることができるであろう。マクロ経済学の分析ツールを借用すれば、1603~1867年は1式、1868年~は2式で表せるであろう。

$$Y_j = C + I \quad (1)$$

$$Y_j = C + I + (X - M) \quad (2)$$

1式は、もっとも原理的な国民所得決定式である。鎖国だったから貿易は考慮されていない。2式は、開国後、つまり国際化が始まっているので輸出 ( $X$ ) と輸入 ( $M$ ) が考慮されている。マクロ経済学で解釈すると、国際化は「貿易収支の増減が貿易乗数を通じて国民所得に影響を与えるようになること」と定義できるであろう。

マクロ経済学的に国際化を定義できたので次に日本の Globalization を定義してみたい。国際化と世界化の相違点は現地化であった。現地化を経済学的に解釈すれば、対外直接投資 (FDI) が思い浮かぶ。これは、海外への民間投資と考えられる。対外直接投資を ( $I_f$ ) で表すと 1985 年以降は 3 式で表せるであろう。つまり、対外直接投資が増え、現地化が進展するほど、国内の投資は減少する。

$$Y_j = C + (I - I_f) + (X - M) \quad (3)$$

マクロ経済学的に考察すれば、対外直接投資の増加は、( $\Delta I_f$ ) で表せる。これは投資乗数によって外国の国民所得を増加させるであろう。更にもし外国が貿易黒字であるならば、貿易乗数によって外国の国民所得が更に増加するであろう。このように考えると外国人に同感を持ってない人にとって Anti-Globalization は当然であると言える。

## おわりに

以前、世界経済論と国際経済論に関する本を日本で 2 冊読んだ。一方の本は、世界経済を 1 つの市場であると見るならば、世界経済論であるし、いくつかの国民経済の集合体であると見るならば国際経済論だった。結論として、世界は、消費財はともかく、生産財、資本、労働、技術の流通がまだまだ不自由であるから、国際経済論が適当だった。もう一方の本は、分析として生産物はともかく、生産要素の流通はまだ不十分であるとしながらも、南北問題、特にアジアとアフリカの貧困を憂う故に世界経済論でありたいだった。

ここでは、実証的経済学と規範的経済学の是非は語らず、ただ経済学が実証分析を旨とする限り、世界経済はまだ 1 つの市場ではないということで意見は一致することが言いたい。経済学的には、Globalization の完成は、世界経済が 1 つの市場であることを前提にした 4 式で表せるであろう。

$$Y_w = C_w + I_w \quad (4)$$

$Y_w$  は世界市民所得とでもいうべき概念である。私の結論は、日本の Globalization、つまり世界化とは、2 式と 4 式の間過程、つまり 3 式である。

この結論は、中国の Globalization を分析する参考になるだろう。

最後にこのレポートはまず日本語で作成し、中国語に翻訳した。翻訳では北京平成日本語学校の侯先生に大変お世話になった。ここに感謝の意を表したい。

## 参考文献

- [1] 金森久雄他編 (1998) 『有斐閣 経済辞典 第3版』 有斐閣。
- [2] 朝日新聞社 (1996) 『朝日現代用語 知恵蔵 1996』 CD-ROM。
- [3] 自由国民社編 (1995) 『現代用語の基礎知識 1995』 自由国民社。
- [4] 平凡社編 (1994) 『マイペディア』 CD-ROM 辞典盤。
- [5] 長谷田彰彦著 (1984) 『完全体系 経済学事典』 富士書店。